

【研究論文】

「成人のレジリエンス尺度（ARM-R）日本語版」の作成と若者のレジリエンスを構成する因子の基礎的分析

中 村 和 彦

## 研究論文

# 「成人のレジリエンス尺度（ARM-R）日本語版」の作成と 若者のレジリエンスを構成する因子の基礎的分析

中村和彦

Kazuhiko NAKAMURA

## 目次

1. 意義と目的
2. 研究展開上の理論背景
  - (1) ユースワーク
  - (2) レジリエンス思考
  - (3) ソーシャルワーク
3. 「成人のレジリエンス尺度（ARM-R）日本語版」の作成と妥当性の検討
  - (1) 方法
  - (2) 結果
4. 若者のレジリエンスを構成する因子の基礎的分析
  - (1) 結果
5. 本稿の結論と今後の課題

## [Abstract]

Creation of “The Japanese Version of the Adult Resilience Measure (ARM-R)” and Basic Analysis of the Factors that Constitute Resilience in Young People

This study developed “the Japanese version of the Adult Resilience Measure (ARM-R).” A questionnaire survey of young people using “Youth<sup>+</sup>,” a youth support facility was conducted and the results survey confirmed a certain degree of validity and suggested that the scale could be utilized in the future.

In addition, three factors were identified as components of resilience: “relationship with family (partner),” “good interactive relationship with surroundings,” and “support from friends.”

However, many issues require further examination. The reliability and validity of “ARM-R” must be verified, and further surveys of a wide variety of people must be analyzed in detail. Moreover, since the clarification of the constructs of resilience is directly related to the practical focus of nurturing and establishing resilience, further quantitative and qualitative research and analysis must be considered in future research and practice.

## 1. 意義と目的

「友人・仲間づくりがうまくできない」、「ひきこもり状態に陥っている」、「仕事の世界から排除されている」といった若者が抱えている諸課題は昨今、社会的課題として認識されてきている。本研究の一大目標は、それらの諸課題を、若者本人にとっての「難事・難局」、「逆境」や「アドバーシティ adversity」状態にとらえ、これからの若者支援、ユース

ワークの展開について、「レジリエンス思考 Resilience Thinking」を基盤に据え、ソーシャルワークの発想、視野・視点、「居場所づくりとコミュニティ参加」、「エンパシー能力醸成とサードプレイス構築」という要点から構築していこうということにある。端的には、「ユース・ソーシャルワーク実践」の基盤を組み立てることにあると言えるであろう。

加えて本研究の一大構想は、難局を乗り越えるために、個人とコミュニティ、パーソナ

キーワード：ユースワーク、ユース・ソーシャルワーク、レジリエンス思考、成人のレジリエンス尺度、若者のレジリエンス因子

Key words: youth work; youth social work; resilience thinking; ARM-R; factors of youth resilience

ルとコミュニティ双方のレジリエンス（再起・新生力）を育み、高めるという意味に集約される「レジリエンス思考」を基盤とした新しい若者支援、ユースワークの内容と方法を具体的に提示することにある。そこでこの度の一連の研究は、実体に肉薄し、把握・理解を進めるための基礎的調査研究と位置づけ、札幌市内において「ユースワーク」を展開している「札幌市若者支援施設 Youth<sup>+</sup>（ユースプラス）」（以下、「Youth<sup>+</sup>」という）との研究協働体制を構築し、実践的研究を推し進めた。具体的には、Youth<sup>+</sup>を利用している若者へのアンケート調査及び、インタビュー調査、加えてユースワーカーへのインタビュー調査を実施し、その結果への分析と考察をおこなうことを計画した。本稿は、若者におこなったアンケート調査結果のうち、レジリエンスを測定するための「成人のレジリエンス尺度（ARM-R）日本語版」の作成と、その妥当性の検討及び、若者のレジリエンスを構成する因子について、その基礎的な分析をおこなったものである。

なお、本研究の実施にあたっては、研究課題『若者の居場所づくりとコミュニティ参加支援—レジリエンス思考によるユースワークの展開』の研究倫理審査を北星学園大学研究倫理委員会に申請し、2021年10月13日に承認を得ている（21-研倫第41号）。

## 2. 研究展開上の理論背景

本研究を構想し展開する上で、基盤となる主要な考え方、鍵概念は、「ユースワーク Youth Work」、 「レジリエンス思考 Resilience Thinking」、 「ソーシャルワーク Social Work」である。そこで以下に、それぞれの要点について触れておくことにしたい。

### (1) ユースワーク Youth Work

平塚（2018：26）によればユースワーク

は、ヨーロッパ（イギリスやドイツ、フィンランド等）において、「19世紀後半に生まれ、1960年代ぐらいから制度化」されるようになり、それはヨーロッパ各国の「福祉国家の発達とセット」であり、「保障すべき社会環境の一つとしてユースワーク、すなわち10代の人たちに文化の機会を提供する活動をつくっていくことも国や自治体の責任と考えるようになってきた」ことに端を発している。日本においては、若者のひきこもり、「フリーター」や「ニート」の問題に焦点があてられる中、2006年に「地域若者サポートステーション」、2009年に「ひきこもり地域支援センター」がスタート、2010年に「子ども・若者育成支援推進法」の制定、「勤労青少年福祉法」の「若者雇用促進法」への改正（2015）、そして2016年の「子ども・若者育成支援推進大綱」の制定といった施策が継続的に展開され、若者支援、ユースワークへの関心が年々高まってきている。

現在においてユースワークをどのようにとらえるのか、ユースワークの歴史や変遷、内容や方法により、さまざまなとらえ方が存在する。柴野（2009:9-10）によればユースワークとは、「グループ活動を通して、ユースワーカーが、青少年・若者の人間的成長を支援（援助）する方法」、「青少年自身の自己形成をうながす方法であり、いつでも、どこでも利用可能なグループ活動」であるといえる。また、「どのような場所であってもグループ経験を通して自己成長の機会が提供されるサポート・サービス」であり、「青少年・若者の側から見れば、それは他者との付き合い方（コミュニケーション・スキル）や自信のつけ方（アイデンティティ・スキル）を習得する場として活用しうるもの」と理解することができる。

ところで生田（2021）は、これまでの研究成果を踏まえ、日本の子ども・若者支援には四つの欠損があることを指摘している。それ

は、①包括的な「第三の領域」、②支援する「専門職」、③それを支える「学問」、④子ども・若者支援の権利性、4点からなる欠損である。そのうち①を検討する際、第一の領域として、芸術的・文化創造的活動、地域連携・ボランティア活動、居場所づくり・相談活動などから構成される「ユニバーサル・サービスとしてのユースワーク」、第二の領域として、不登校・ニート・ひきこもり支援、障害のある子ども・若者の支援、貧困への支援などから構成される「ターゲット・サービスとしてのユース・ソーシャルワーク」を付置し、「社会教育的支援」概念を作業仮説とし、包括的な第三の領域としての子ども・若者支援を構想している。この視座は、日本における今後のユースワーク、広く若者支援を精緻化していくうえで非常に重要なものと考えられる。また岡部（2019）は、ユースワークの議論を踏まえつつ、「若者の経験する生活困難を対象」とし、「若者や若者が直面している具体的問題への働きかけであると同時に若者の生活する社会構造への働きかけ」でもある「若者が社会的存在として生き、生活するための基本的な権利を実現するための実践」を「若者ソーシャルワーク」として定義し研究を推進している。この視座や発想もまた、今後において重要なものとなると考えられる。

## (2) レジリエンス思考 Resilience Thinking

次にレジリエンス思考について整理しておくことにしたい。Resilienceは日本において、レジリエンスとカタカナ表記されることが多いが、一般に「復元力」や「回復力」と訳されている。ラテン語のresilire（跳ね返る）を語源とし、元来は物理学用語であり、ゴムやばねの両端を引っ張り、放した後の戻り力や弾性を表した用語である。その後、環境学、医学、心理学、教育学を代表にさまざまな分野・領域において重要な概念となり、特に日本においては、2011年発災の東日本大震災以後の復興、防災・減災を考え、構想する文脈

において不可欠な考え方として取り入れられてきている。レジリエンスの単語はテレビコマーシャルにも登場し、その内容を取り上げた雑誌や書物の公刊は枚挙にいとまがなく、いまや「標語」化の様相を呈しているといっても言い過ぎではないであろう。ここでは、Resilienceに日本語をあてる場合には「再起・新生力」を、カタカナ表記する場合には、英単語の発音に忠実に表記するならば「リジリエンス」であろうが、普及状況を鑑み、「レジリエンス」を採用することにしておきたい。

ところでレジリエンスは、取り扱い方によっては、包括的概念であるしメタ理論といってもよい多義的なものであり、その定義も種々存在している。ここでは、三つの定義を紹介しておくことにしたい。環境保全の分野に、社会生態 Social-ecology の視座（人と自然がつながったシステム）からレジリエンス思考を導入した第一人者であるウォーカーとソルト Walker, B & Salt, D(2020)は、レジリエンスを「システムが攪乱を吸収しながらも基本的な機能と構造を維持する能力」と定義している。それは、「攪乱」を生態系の構成や機能（システム）に影響を及ぼす作用、具体には、山火事や大気汚染、自然災害等々と考え、それに抗する、リスクと複雑性に相関した「再起する力」ということができよう。

人間の発達の視座から、子どもや若者のレジリエンスをいかに育むことができるのかを要点に研究を推進し続けている米国ミネソタ大学に所属するレジリエンス研究の世界的リーダー、マステン Masten, A (2020)は、「自らの機能、存続または発達を脅かすものに適応する、動的システムのキャパシティ」あるいは、「あるシステムの機能、存続または発達を脅かす攪乱にうまく適応する、力動的なキャパシティ」と定義し、動的なシステムを強調する。加えて、マステンの研究は、子どもや若者のレジリエンスに焦点をあてら

れているものの、「家族、学校、コミュニティ、組織、経済、生態系などの多様な動的システム」にも適用できることを明示している。

最後に、カナダ東部・ノヴァスコシア州・ハリファックス市にあるダルハウジー大学の附属施設になっているレジリエンス研究センター Resilience Research Centre (RRC) の主席で、ソーシャルワーク学部の教授も務め、マステン同様レジリエンス研究の世界的リーダーであるウンガー Ungar, M の定義を紹介することにしたい。ウンガーは、ソーシャルワークの立場から、Kurt Z. Lewin の「場の理論」、社会構成主義、社会生態学、家族療法学等の知見を摂取し、レジリエンス研究を推進している。ウンガーはレジリエンスを次のように定義している (2019)。

レジリエンスとはその人にとって重い逆境、重大な困難・難事が現れるなかで、個人の心理的、社会的、文化的、身体的、物

的資源から本人に作用するものを探し出し (navigate)、順調な生活 (well-being) を維持する能力であると共に、これらの資源が文化的に本人にとって意味ある方法で提供され、利用できるように、交渉する (negotiate) 個的・集合的な能力のことである。

この定義では、利用可能な資源 (他者との結びつき、自尊、安全、教育、成長の出発となる通過儀礼の経験などの機会) に安全にアクセスする個人の能力であること、文化的に偏った価値や信条が映し出されているなかで、その人にとって意味のある資源を確保することを強調している。加えて逆境のなかでレジリエンスを生み出した若者には7つの側面、要素、過程が備わっていることを明らかにしている。表1はそれらの側面を解説したものであるが、今後の若者支援、ユースワークの展開を考える際にも大いに参考となる視

表1 若者のレジリエンスの側面 (ウンガー 2019)

側 面	解 説
1. 物的資源へのアクセス	金銭・教育資源の可用性 (利用の可能性); 医療サービス、雇用の機会、衣食住へのアクセス
2. 支援的関係の発見や維持	意味ある他者、仲間、メンター (相談相手)、家庭やコミュニティでの家族との繋がり
3. 強力な一体感の醸成	満足感やプライドなどの気持ちを満たす自分は何者かの、個的、集合的意識; 生きる目的意識、強さ/弱さの自己評価、向上心、信念と価値、精神的・宗教的一体感
4. 力と統制の経験	自己と他者の面倒を見ることができる経験、個人的・管理的効力、資源にアクセスするために社会的・物的環境へ変化をもたらす能力; 方針を立てる力
5. 文化的規範や活動への順応	ローカルかつグローバルな文化活動への順応; 世代を超えてもしくは背景となる家族やコミュニティで伝承される価値や信条の保持
6. 社会的正義を経験する機会の探求	コミュニティのなかで有意義な役割を見つけることに関連する経験; 社会的平等; 参加する権利; 貢献する機会
7. 社会的結束のため機会の活用	より良いことへの責任感と個人的関心のバランスが取れていること; 社会的・精神的に自己より大きな何かの一部を構成しているような感覚

点であると考えられる。

### (3) ソーシャルワーク Social Work

最後にソーシャルワークであるが、本研究の一大課題は、若者支援、ユースワークを、ソーシャルワーク固有の発想、視野・視点から再構築し、実践展開に結びつけようとするところにある。

中村（2020）は、ソーシャルワークの一大特性である実践展開の「過程」を重視し、ミクロ実践とマクロ実践の双方を強調し、ソーシャルワークを次のように定義している。

ソーシャルワークとは、利用者（クライアント）と専門支援者（ソーシャルワーカー）との参加と協働のもと、利用者の自己決定過程を最大限保障したうえで、利用者自らが、生活上の課題解決、社会的機能の改善・維持・向上、外部環境への対処能力の向上を図れるよう支援し、他方で、社会環境への介入をおこない、さらには社会構造の変革を意図し、生活継続のための条件整備として、社会福祉・社会保障にかかる制度・政策、具体的サービスの維持・向上・創出を実現する、その時点における利用者の最善の利益を確保・獲得する過程展開である。

また、ソーシャルワークは、

- ① 「人と環境の相互作用 Human-environment transaction」という焦点
- ② 生活上の課題解決を目標とした「生活支援 Life enhancement」
- ③ 具体的な支援標的としての「社会的機能 Social functioning」

という特性を有した支援科学であり、人を「生物（バイオ）Bio」、心理（サイコ）Psycho」、共同体（コミューナル）Communal」、社会（ソーシャル）Social」

の統合的視点から捉え、実践は、「ミクロ micro」、メゾ mezzo」、マクロ macro」の総合的な範囲で展開されるユニークな発想をもった包括的な実践概念である。これらの特徴を踏まえ、今後の若者支援、ユースワークを考えることが肝要であると思われる。

## 3. 「成人のレジリエンス尺度（ARM-R）日本語版」の作成と妥当性の検討

### (1) 方法

前出のレジリエンス研究センター（Resilience Research Centre :RRC）で開発された「Adult Resilience Measure-Revised（ARM-R）」<sup>注(1)</sup>を筆者がオリジナル項目の内容や意味、ニュアンスに留意し日本語訳を行った。その後、英語を母語とする研究者2名に依頼しバックトランスレーションを実施、その結果を受け、「北海道ユースワーク実践研究会」（以下、「研究会」とする）<sup>注(2)</sup>において検討を重ね、改めて修正を加えたものを「成人のレジリエンス尺度（ARM-R）日本語版」（表2）として整え、調査に使用することとした。

アンケート調査の実施にあたっては、先行研究のレビューを実施し、本研究の目的を達成するために必要な調査内容や調査項目を選択、上記研究会において協議の上、最終的に、「成人のレジリエンス尺度（ARM-R）日本語版」を含むAからFの6領域、計55項目からなる調査票を作成した。A領域は17項目からなる「成人のレジリエンス尺度（ARM-R）日本語版（五件法）」（表2）であり、B領域は、A領域との関連性を把握する意味から、14項目からなる「エゴ・レジリエンス尺度（ER89）日本語版（四件法）」（畑・小野寺 2013）、また、C領域は「日本語版 Short-form UCLA 孤独感尺度（第3版）3項目版（四件法）」（Arimoto & Tadaka 2019）を採用した。D領域は12項目からなる「コミュニティ意識尺度（短縮版）」

(五件法)」(石盛・岡本・加藤 2013), E領域は、斉藤らによる「地域単位の健康関連ソーシャルキャピタル指標 ver4.1」(Saito et al. 2017)のうち、「問9 あなたの住んでいる地域についておうかがいします(五件法)」の三項目を採用した。

B領域の「エゴ・レジリエンス尺度(ER89)日本語版(四件法)」は、Block & Kremen (1996)が作成した14項目からなるエゴ・レジリエンス尺度(ER89)を、畑と小野寺(2013)が大学生を対象に調査を実施し、信頼性と妥当性を検討したものである。本尺度

においては得点が高ければ高いほど、「日常的な内的、あるいは外的なストレスに対して柔軟に自我を調整し、状況にうまく対処し適応できるとされるパーソナリティ特性」(畑・小野寺 2013:37)である「エゴ・レジリエンス(ER)」が高いとされる。次にC領域の「日本語版Short-form UCLA孤独感尺度(第3版)3項目版(四件法)」(Arimoto & Tadaka 2019)の質問項目は、「自分には人との付き合いがないと感じることがありますか」、「自分は取り残されていると感じることがありますか」、「自分は他の人たちから孤

表2 成人のレジリエンス尺度(ARM-R)日本語版

以下の記述は、あなたに、どの程度あてはまるかお答え下さい。

あてはまる番号ひとつに、○をつけて下さい。正解や不正解はありません。

	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	非常にあてはまる
(1) 私は、周りの人とうまくやっけていける	1	2	3	4	5
(2) 資格を取得したり、スキルを向上させたりすることは、自分にとって重要である	1	2	3	4	5
(3) 職場、家庭、その他の公共の場など、さまざまな社会的状況の中で、どのように振る舞えばよいか知っている	1	2	3	4	5
(4) 家族は自分を支えてくれる	1	2	3	4	5
(5) 家族は私のことをよく知っている(たとえば、友人は誰か、何をするのが好きかなど)	1	2	3	4	5
(6) お腹が空いた時は、たいいて十分な食べ物を手に入れることができる	1	2	3	4	5
(7) 人(他者)は、私と一緒に時間を過ごすのが好きだ	1	2	3	4	5
(8) 悲しいときや心配なときなど、自分の気持ちを家族やパートナーに話している	1	2	3	4	5
(9) 友だちに支えられていると感じる	1	2	3	4	5
(10) 自分はコミュニティ(地域社会)に所属していると感じている	1	2	3	4	5
(11) 私の家族やパートナーは、私が病気やトラブルに見舞われているときなど、つらいときに、私を支えてくれる	1	2	3	4	5
(12) 私の友人は、私が病気やトラブルに見舞われているときなど、つらいときに、私を気づかってくれる	1	2	3	4	5
(13) 私はコミュニティ(地域社会)の中で、公平に扱われている	1	2	3	4	5
(14) 自分が責任を持って行動できる人間であることを、人(他者)に示す場面や機会がある	1	2	3	4	5
(15) 家族やパートナーと一緒にいるときは安心できる	1	2	3	4	5
(16) 生活の中で自分の能力を発揮する機会がある(技術を使う、仕事をする、人の世話をするなど)	1	2	3	4	5
(17) 自分の家族やパートナーが持っている文化や生活様式、家族が何かを祝う方法が好きである(お盆やお正月、記念日や祝祭日の過ごし方、その他の生活様式や文化について学ぶなど)	1	2	3	4	5

立していると感じることがありますか」の3項目となっている。つまり3項目版の場合には、得点の高さは孤独感の強さを示すことになる。

そして、D領域の「コミュニティ意識尺度（短縮版）（五件法）」（石盛・岡本・加藤2013）は、27項目から構成される「コミュニティ意識尺度・原版」の利便性を高めるために開発されたものであり、「連帯・積極性」、「自己決定」、「愛着」、「他者依頼」の4因子から構成された12項目からなる尺度である。得点の高さは回答者のコミュニティに対する意識の高さを示すことになる。加えて、E領域の齊藤らによる「地域単位の健康関連ソーシャルキャピタル指標 ver4.1」（Saito et al. 2017）は、11指標から構成されているが、そのうち「あなたの地域の人々は、一般的に信用できると思いますか」、「あなたの地域の人々は、多くの場合、他の人の役に立とうとすると思

いますか」、「あなたの現在住んでいる地域にどの程度愛着がありますか」の3指標を使用した。最後に、F領域の6項目は回答者自身のことを尋ねる項目、年齢や学年、仕事に従事してからの通算年数、Youth<sup>+</sup>の利用年数や利用頻度、スタッフへの相談頻度等とした。なお、回答者の負担を軽減するためにE領域の項目を抑えるとともに、当初、調査項目に予定していた角田（1994）による「共感経験尺度改訂版（EESR）」（20項目）については実施しなかった。

以上の項目からなる質問紙を作成し、札幌市内5箇所のYouth<sup>+</sup>において、スタッフ（ユースワーカー）に、若者が利用した際に個別に配布、回収する方法を依頼し調査を実施した。質問紙には「同意欄」を設け、その欄にチェックがあった場合、注意事項を読んだ上、同意があったものとした。実際の調査は、2021年10月25日～12月3日の間に実施

表3 調査対象者の属性

(1) 平均年齢：	19.6歳（SD=3.5）
(2) 学年：	高校1年9.0%（12名）、高校2年14.3%（19名）、高校3年19.5%（26名）、 専門学校1年0.8%（1名）、専門学校2年3.0%（4名）、 専門学校3年0.8%（1名）、大学1年6.8%（9名）、大学2年5.3%（7名）、 大学3年3.0%（4名）、大学4年9.0%（12名）、その他6.8%（9名） 欠損21.8%（29名）
(3) 社会人経験平均年数：	3.5年（SD=2.9）
(4) Youth <sup>+</sup> 利用平均年数：	1か月以内16.5%（22名）、1～3か月5.3%（7名）、 3～6か月7.5%（10名）、6か月～1年6.8%（9名）、 1年～3年39.1%（52名）、3年以上24.1%（32名）、欠損0.8%（1名）
(5) Youth <sup>+</sup> 利用平均頻度：	ほぼ毎日8.3%（11名）、週に数回程度25.6%（34名）、 週に数回程度25.6%（34名）、週に1回程度21.8%（29名）、 2週に1回程度9.8%（13名）、月に1回程度9.0%（12名）、 数か月に1回程度13.5%（18名）、その他9.8%（13名）、欠損2.3%（3名）
(6) Youth <sup>+</sup> スタッフへの相談頻度：	相談したいことはあるが、相談したことはない6.8%（9名）、 相談したいと思ったことはない36.1%（48名）、 その他9.0%（12名）、欠損2.3%（3名）

n=133 SD: standard deviation



され、5 機関において極端なばらつきがなく、計133名から回答を得ることができた。

## (2) 結果

はじめに、調査対象者の属性について集計をおこなった結果、表3のとおりであった。

次に表4は、この度回答を求めた各尺度の分布を示したものである。なお、調査票のE領域にあたる斉藤らによる「地域単位の健康関連ソーシャルキャピタル指標 ver4.1」については、今回の分析からは除外した。

「成人のレジリエンス尺度 (ARM-R) 日本語版」は、17項目について、「まったくあてはまらない：1」、「あまりあてはまらない：2」、「どちらともいえない：3」、「ややあてはまる：4」、「非常にあてはまる：5」の五件法で回答を求めた。そのため最小得点は17点、最高得点は85点となる。表3にあるように今回調査では、平均値65.7 (SD=12.1)、中央値68、最頻値75の結果となった。

その上で表5は、「成人のレジリエンス尺度 (ARM-R) 日本語版」と他の3尺度との相関関係を分析した結果を示したものである。なお、有意水準は5%未満とした。第一に「エゴ・レジリエンス尺度 (ER89)」との間では、有意 ( $p < .001$ ) な正の相関 ( $r = .51$ ) が示された。この結果は、「成人のレジリエンス尺度 (ARM-R) 日本語版」で測定されたレジリエンス (再起・新生力) が高い人は低い人に比べ、エゴ・レジリエンス (ER) が高いことが今回調査では確認されたことになる。第二に「UCLA 孤独感尺度」との間

では、負の相関 ( $r = -.57, p < .001$ ) が示された。この結果は、「成人のレジリエンス尺度 (ARM-R) 日本語版」で測定されたレジリエンス (再起・新生力) が高い人は低い人

表4 各尺度の分布

	n(%) <sup>a</sup>
<b>成人のレジリエンス尺度 (ARM-R)</b>	
平均値±SD	65.7±12.1
中央値	68
最頻値	75
最小値	22
最大値	85
<b>エゴ・レジリエンス尺度 (ER89)</b>	
平均値±SD	40.1±6.7
中央値	40
最頻値	37
最小値	23
最大値	56
<b>UCLA孤独感尺度</b>	
平均値±SD	5.5±1.8
中央値	5
最頻値	6
最小値	3
最大値	9
<b>コミュニティ意識尺度</b>	
平均値±SD	40.1±6.3
中央値	40
最頻値	39
最小値	24
最大値	54

n = 133 SD: standard deviation

表5 ARM-Rと他尺度との相関関係の結果

	相関係数	95%信頼区間		p
		下限値	上限値	
エゴ・レジリエンス尺度 (ER89)	0.51	0.37	0.63	<.001
UCLA孤独感尺度	-0.57	-0.68	-0.43	<.001
コミュニティ意識尺度	0.39	0.23	0.53	<.001

Speramanの順位和相関分析

n=133

に比べ、孤独感が低いことが、今回調査から確認された。第三に、「コミュニティ意識尺度」との間では、正の相関 ( $r = .39, p < .001$ ) が示された。この結果により、「成人のレジリエンス尺度（ARM-R）日本語版」で測定されたレジリエンス（再起・新生力）が高い人は低い人に比べ、コミュニティに対する態度が肯定的であり意識が高いことが確認され

た。

以上の結果から、他の3尺度との間には、いずれも有意な相関が認められ、今回作成した「成人のレジリエンス尺度（ARM-R）日本語版」は、一定程度の妥当性を有する尺度であると認めることができる。

表6 ARM-R の因子分析（主因子法・バリマックス回転）の結果

因子と項目	因子		
	I	II	III
<b>因子 I：家族（パートナー）との関係性（<math>\alpha = .89</math>）</b>			
(11) 私の家族やパートナーは、私が病気やトラブルに見舞われているときなど、つらいときに、私を支えてくれる	<b>0.869</b>	0.156	0.149
(4) 家族は自分を支えてくれる	<b>0.845</b>	0.078	0.067
(15) 家族やパートナーと一緒にいるときは安心できる	<b>0.742</b>	0.294	0.236
(5) 家族は私のことをよく知っている（たとえば、友人は誰か、何をするのが好きかなど）	<b>0.695</b>	0.189	0.061
(8) 悲しいときや心配なときなど、自分の気持ちを家族やパートナーに話している	<b>0.581</b>	0.256	0.21
(6) お腹が空いた時は、たいてい十分な食べ物を手に入れることができる	<b>0.564</b>	0.135	0.062
(13) 私はコミュニティ（地域社会）の中で、公平に扱われている	<b>0.553</b>	0.414	0.268
<b>因子 II：周囲との良好な双方向関係（<math>\alpha = .83</math>）</b>			
(1) 私は、周りの人とうまくやっていける	0.282	<b>0.722</b>	-0.015
(10) 自分はコミュニティ（地域社会）に所属していると感じている	0.157	<b>0.697</b>	0.263
(3) 職場、家庭、その他の公共の場など、さまざまな社会的状況の中で、どのように振る舞えばよいか知っている	0.169	<b>0.664</b>	0.097
(16) 生活の中で自分の能力を発揮する機会がある（技術を使う、仕事をする、人の世話をするなど）	0.049	<b>0.588</b>	0.346
(7) 人（他者）は、私と一緒に時間を過ごすのが好きだ	0.201	<b>0.587</b>	0.108
(14) 自分が責任を持って行動できる人間であることを、人（他者）に示す場面や機会がある	0.114	<b>0.466</b>	0.332
(17) 自分の家族やパートナーが持っている文化や生活様式、家族が何かを祝う方法が好きである（お盆やお正月、記念日や祝祭日の過ごし方、その他の生活様式や文化について学ぶなど）	0.378	<b>0.394</b>	0.22
(2) 資格を取得したり、スキルを向上させたりすることは、自分にとって重要である	0.234	<b>0.377</b>	0.116
<b>因子 III：友人からの支え（<math>\alpha = .75</math>）</b>			
(12) 私の友人は、私が病気やトラブルに見舞われているときなど、つらいときに、私を気づかってくれる	0.367	0.234	<b>0.726</b>
(9) 友だちに支えられていると感じる	0.134	0.476	<b>0.531</b>
<b>因子間相関 I</b>			
	—		
	II 0.55	—	
	III 0.51	0.52	—

## 4. 若者のレジリエンスを構成する因子の基礎的検討

### (1) 結果

今回、質問紙調査に回答した Youth<sup>+</sup> を利用する若者のレジリエンス（再起・新生力）を構成する因子を検討するため、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った（尺度全体のクロンバックの  $\alpha$  係数は、.91 で十分な値が得られた）。表6はその結果を示したものであるが、今回の分析では、「Ⅰ：家族（パートナー）との関係性」（ $\alpha = .89$ ）、「Ⅱ：周囲との良好な双方向関係」（ $\alpha = .83$ ）、「Ⅲ：友人からの支え」（ $\alpha = .75$ ）の3因子構造が得られた。若者のレジリエンス（再起・新生力）がどのような構造から成り立っているかを知ることは、レジリエンスを育てていく際の要点となり、「家族」、「周囲」、「友人」の3要素は、これからの実践的な意味において極めて重要であると考えられる。

他方で、必ずしも因子に高く負荷している項目ではないが、因子Ⅰにおける項目(6)「お腹が空いた時は、たいてい十分な食べ物を手に入れることができる」、項目(13)「私はコミュニティ（地域社会）の中で、公平に扱われている」や、因子Ⅱにおける項目(17)「自分の家族やパートナーがもっている文化や生活様式、家族が何かを祝う方法が好きである」、項目(2)「資格を取得したり、スキルを向上させたりすることは、自分にとって重要である」の因子に負荷する意味等の考察が必要である。

## 5. 本稿の結論と今後の課題

難事や難局、逆境状態にある若者に対し、レジリエンス思考を基盤に据え、ソーシャルワークの発想、視野・視点から、若者を支援し、レジリエンス（再起・新生力）を育て、課題解決を目指そうとする「ユース・ソーシャル

ワーク実践」の基盤を構築しようとする一大目標を掲げた研究の中で、本稿においては、「成人のレジリエンス尺度（ARM-R）日本語版」を作成し、若者支援施設である Youth<sup>+</sup> を利用している若者に対しアンケート調査を実施した。今回の調査結果からは、一定程度の妥当性を確認でき、今後活用しうる尺度であること示唆された。

また、若者のレジリエンス（再起・新生力）を構成する因子として、「家族（パートナー）との関係性」、「周囲との良好な双方向関係」、「友人からの支え」という3因子を確認することができた。

他方で今後の課題も山積しており、今回作成した「成人のレジリエンス尺度（ARM-R）日本語版」の信頼性、妥当性をさらに検証していかなければならず、多様な者への調査を継続し、精緻な分析を行っていかなければならない。加えて、レジリエンス（再起・新生力）の構成因子の解明は、レジリエンス（再起・新生力）を育み、定着させるという実践焦点に直結することから、量的、質的双方のさらなる調査と分析に傾注しなければならない。それらの研究実践を含め、「ユース・ソーシャルワーク実践」の構築が、今後の一連の研究実践の一大目標となろう。

### 〔注〕

- (1) レジリエンス研究センター（RRC）で開発されたレジリエンスの測定尺度には、10歳未満を対象にした子ども版、10代を中心とした若者版、またコミュニティ・レジリエンスを測定するもの等、複数開発され、世界十数カ国で調査研究が実施されている。日本での調査実施は今回が初めてである。
- (2) 北海道ユースワーク実践研究会とは、本研究を推進するために結成された Youth<sup>+</sup> のスタッフ、現場のソーシャルワーカー及び、大学に所属するソーシャルワーク領域の研究者からな

る任意の研究集団である。

## 〔文献〕

- Arimoto A & Tadaka E (2019). Reliability and validity of Japanese versions of the UCLA loneliness scale version 3 for use among mothers with infants and toddlers: a cross-sectional study. *BMC Women's Health*, 19, 105.
- Block, J., & Kremen, A. M. (1996). IQ and ego-resiliency: Conceptual and empirical connections and separateness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 349-361.
- 畑潮・小野寺敦子 (2013) 「Ego-Resiliency 尺度 (ER89) 日本語版作成と信頼性・妥当性の検討」日本パーソナリティ心理学会『パーソナリティ研究』第22巻、第1号、37-47頁。
- 平塚眞樹 (2018) 「若者と居場所をつくる一日欧のユースワークの現場から」『生涯発達研究』第11号、25-35頁。
- 生田周二 (2021) 『子ども・若者支援のパラダイムデザイナー “第三の領域” と専門性の構築に向けて』かもがわ出版。
- 井上慧真 (2019) 『若者支援の日英比較—社会関係資本の観点から』晃洋書房。
- 石盛真徳・岡本卓也・加藤潤三 (2013) 「コミュニティ意識尺度（短縮版）の開発」『実験社会心理学研究』第53巻第1号、22-29頁。
- 角田豊 (1994) 「共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み」『教育心理学研究』第42巻、193-200頁。
- アン・マステン／上山眞知子・J. F.モリス訳 (2020) 『発達とレジリエンス—暮らしに宿る魔法の力』明石書店。(=2014, Ann S. Masten, *ORDINARY MAGIC: Resilience in Development*. The Guilford Press.)
- 岡部茜 (2019) 『若者支援とソーシャルワーカー—若者の依存と権利』法律文化社。
- Resilience Research Centre (2019). 『*Child and Youth Resilience Measure (CYRM-R) & Adult Resilience Measure (ARM-R) Manual 2.2*』 Resilience Research Centre, Dalhousie University.

- Saito Masashige, Kondo Naoki, et al. (2017) Development of an Instrumental for Community-Level Health Related Social capital among Japanese Older People: The JAGES project. *Journal of Epidemiology*, 27(5):221-227.
- 柴野昌山 (2009) 「第1章 グループの力を生かす自立支援の技法—なぜユースワークなのか」柴野昌山編『青少年・若者の自立支援—ユースワークによる学校・地域の再生』世界思想社、9 - 35頁。
- マイケル・ウンガー／秋山薊二・中村和彦訳 (2019) 「子ども・若者のレジリエンスに関連する要素と過程 (=Michel Ungar, *Factors and Processes Associated with Resilience among Children and Youth*)」『ソーシャルワーク研究』Vol.45 No.3、236-246頁。
- 中村和彦 (2020) 「ソーシャルワーク実践理論の整備に向けたスケッチ—実践モデル・アプローチ・支援スキルの現在」『北星論集』第57号、162-181頁。
- ブライアン・ウォーカー、デイヴィッド・ソルト／黒川耕大訳 (2020) 『レジリエンス思考—変わりゆく環境と生きる』みすず書房。(=2006, Brian Walker, David Salt, *RESILIENCE THINKING: Sustaining Ecosystem and People in a Changing World*. Island Press.)

## 〔謝辞〕

本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）『人のレジリエンスを促進するコミュニティ要因の実証研究—国際地域比較調査を通して』（課題番号19K02218 研究代表者：中村和彦）及び、令和3年度吉田・飯塚・長瀬基金調査研究事業（北海道社会福祉協議会）の助成を受け実施したものである。助成に対し感謝申し上げます。

また本研究は、札幌市若者支援施設 Youth<sup>+</sup> との研究協働体制を構築することにより実践的研究を推進することが可能となった。また

実際の研究推進にあたっては、「北海道ユースワーク実践研究会」を組織することができた。研究会メンバーは、松田考氏（札幌市若者支援総合センター）、橋本悠貴氏（Youth<sup>+</sup>豊平）、橋本達志氏（ここりカプロダクション）、伊藤恵里子氏（浦河ひがし町診療所）、大友秀治氏（北星学園大学）の諸氏である。感謝申し上げるとともに、今後も継続的に研究を進めてまいりたい。

加えて、上記研究会メンバーでもある米田龍大氏（北海道医療大学大学院・博士後期課程）には、アンケート調査の分析で協力を得た。記して謝すること大である。